

〔新刊書評〕

井上清美 著
現代日本の母親規範と自己アイデンティティ
風間書房, 2013年

岩 下 好 美

自己犠牲的な愛情を前提とした「近代的母親規範」がゆらぎを見せる現代において、ポスト近代的な価値観を抱く「専業主母」たちは、自己と規範との「ずれ」をどのように捉え、どのように対処しているのだろうか。本書は、その疑問に応えるべく、マクロな政策的視点からミクロな個人間の相互作用までを網羅して執筆された意欲作である。なお、本書は、平成22年度にお茶の水女子大学より学位を授与された博士論文を改稿したものである。

まず、本書の構成を紹介すると、序に続く1～8章および終章で成り立っている。第1章および2章は、研究目的の提示やその背景の解説および先行研究の検討となっており、第3章と第4章は保育事業という視点から「母親」に何が求められていたかを整理している。そして、第5章から第8章ではインタビュー調査の概要および結果を示している。終章では、結果の考察について、個人間の相互作用と政策的側面の両方の観点から行っている。

次に、各章ごとの論点を概観してゆく。まず、第1章では、「研究の目的と方法」について、問題背景を示しながら、調査方法および対象設定の妥当性について述べ、研究の目的を提示するという流れになっている。問題背景については、「近代的母親規範」と現代の母親に生じる「ずれ」を指摘している。そして、調査対象について、子どもをあずけるという場面を切り口として、ファミリー・サポート事業における「専業主母」と「あずかり手」の相互行為について質的調査を行うとしている。また、研究の目的として、「現代日本における母親規範と自己アイデ

ンティティの関係を解明する」ことを提示している。

第2章は先行研究の整理・検討である。この章は5節に分かれており、それらは「心性史・歴史学的アプローチによる研究」、「家族の個人化に関する研究」、「母親の心理的側面に焦点をあてた実証研究」、「母親をとりまく人々に着目した研究」そして最後に「子育て支援の制度や実践に関する研究」である。これら先行研究の検討を概観すると、第1節の「心性史・歴史学的アプローチによる研究」では、「母性愛」という概念が自己犠牲的な強い愛情を内包しており、女性が「自然」に持っているもの、としてとらえられてきた流れを概観している。しかし、このような「母性愛」を「自然」なものとする点について、家族史研究という視点から母性愛の普遍性に対して疑問符がつけられたことを指摘している。また第2節では、このように「近代的母親規範が相対化」されてきた背景として、家族の個人化の流れがあるとし、家族社会学における家族の個人化・多様化議論を整理した。同様に、第3節では「母親の心理的側面に焦点をあてた実証研究」でも、母親の育児不安研究がこのような相対化の流れに勢いをつけたとし、「自己犠牲が自己肯定を生み出すメカニズムが内面化されなくなった」(54) 状況を提示した。その一方で「専業主母」の場合は、子どもを育てることが「自己実現」となっている状況を指摘している。しかし同時に、子育ては重労働であるという「アンビヴァレントな感情」を抱かせるものであるとも述べている。また、第4節の「母親をとりまく人々に焦点をあてた

研究」では、子どもをあずけるという行為について、ネットワーク研究の視点から整理している。まず、子どもをあずけるということが、「家族ケア信仰」のもとでは社会的に承認され難い状況を示した。その上で、育児援助ネットワークの中でも祖母と父親をとりあげ、特に父親については育児に携わることが困難な点を指摘している。最後に第5節では、子育て支援や制度については、「近代的母親規範」を内在化したサービス提供者が抱く、子育て支援へのジレンマについて言及した。

第3章および第4章では、子育て支援制度に着目して「制度としての母親規範」について論じている。まず第3章では、戦後から現在にいたるまでの厚生労働白書などを資料として、政策における「専業母」の位置づけを行った。そして、第4章では、「専業母」が子どもをあずけることが可能な、一時保育事業とファミリー・サポート事業について概観をし、さらに、あずけ手とあずかり手の特徴について言及している。そして、保育事業の利用要件の変化について、想定されている場面が「社会的利用」のみであったところから「育児疲れからのリフレッシュ」などの「私的利用」が追加されていった過程を提示し、それにつれて「専業母」のサービス利用が増加したことを示した。そして、ファミリー・サポート事業でも同様の変化が起きていると述べている。

第5章は、調査の概要についての記述である。まず筆者は、調査前に居住区のファミリー・サポート・センターにおいて参与観察をする、厚生労働省関係者の話を聞く、などを行っており、入念な準備がなされたことがうかがえる。調査は、首都圏3地区において「あずけ手」17名と「あずかり手」18名に半構造化インタビューを実施している。調査対象者の特徴を、「あずけ手」と「あずかり手」の対比の上で述べると、大きく異なるのは年齢である。「あずけ手」は30代が中心であるが、「あずかり手」は50歳以上が11名を占めている。この点について筆者は特に言及していないが、それぞれの調査対象者の世

代的特徴から見ると、母親—祖母世代的な価値観相違の位相を見出すことが可能であろう。

6章・7章・8章には、インタビュー調査の結果が提示されている。第6章では、「あずかり手」であるサービス提供者が、自己と、自己に内在化された役割規範の間に生じる「ずれ」に対してどのように対処しているか、について分析を行っている。その結果、あずかり手の自己アイデンティティと近代的母親規範の同一化傾向が浮かび上がり、さらに、役割遂行の対価として現金報酬を受け取ること、および「リフレッシュ利用」をする母たちへ感じる葛藤が見出された。

第7章では、「あずけ手」である母親の「社会的利用」における利用の葛藤とその対処方法に着目して分析をしている。そして、サービスの利用がやむを得ないとされる「社会的利用」においても、「あずけ手」の近代的母親規範と自己アイデンティティには「ずれ」がみられた。その背景には近代的母親規範を背景として、妻が子どもを他者へあずけるという行為に対する、夫からの「批判的なまなざし」などがあった。しかし、あずけることに抵抗があっても、ポジティブな対応でサービスを提供する「あずかり手」との相互作用において、その抵抗感が低減される傾向もみられた。

第8章では、本研究の核ともいえる、あずけ手である母親の「リフレッシュ利用」における葛藤と対処方法について分析をおこなっている。その結果、近代的母親規範と調査対象者たちの自己アイデンティティには「ずれ」があり、また、「リフレッシュ利用」は母親ではない自己を確認するための手段として活用されていた。次に、周囲、例えば子どもの祖父母からの「リフレッシュ利用」に対する批判的な反応については、「あずかり手の使い分け」をして対処していた。しかしながら、批判を回避するために祖父母ではなくファミリー・サポート・センターの会員にあずけても、サービス提供者である「あずかり手」からの「批判的なまなざし」を認識する傾向も見出された。また、それによ

り母親が後ろめたさを感じることも語られている。これらの問題への対処としては、「報酬」があげられ、「報酬」を支払うことで、「あずかり手」からの批判や自己が感じる「後ろめたさ」を相殺するというメカニズムが解き明かされた。最後に、「あずけ手」の母親たちは、近代的母親規範との「ずれ」は認識しながらも、一方で「自分の子どもを自分の手で育てる」ことを重視することで、「自己アイデンティティの再編」を行おうとしていた。

終章は、3節に分かれており、最初が調査結果の整理、次に本書のテーマでもある「現代日本の母親規範と自己アイデンティティの葛藤という事象」から見出された論点の考察、そして最後に子育て支援への意見を提示している。最初の調査結果の整理において、「あずかり手」は、自己犠牲などを伴う近代的母親規範を参照した自己アイデンティティを「拠り所」として「子どものため」にケアを提供していることが示された。その一方で「あずけ手」の母親たちは、「自分の子どもを自分で育てる」ことを重視し、また同時に働く母親との対比で「自己アイデンティティの再編」をする状況にあると述べられている。そして、母親たちのアイデンティティは、「あずける—あずかる」場面で生じる相互作用や、根強い近代的母親規範、および固定的な雇用制度などの要因によって、「近代的母親規範と自己アイデンティティの同一化へと収束」(283)していく傾向が見出されたとした。次の「結論」では、「制度的レベル」での近代的母親規範の相対化が進んでいるが、「状況の規範というレベル」では「近代的母親規範は行為者の自己アイデンティティを規定している」(287)と述べている。そして、「専業母」たちが行っている「アイデンティティの再編」—「自分の手で自分の子どもを育てる」ことに価値を見出す姿勢の背後にある「子どもをあずけることに罪悪感がない」という矛盾を指摘し、結果として「アイデンティティ再編」に綻びがあることを描き出した。そして筆者は、これらの結論と考察を踏まえて、現在は近代的母親規範を

基盤として成り立っているファミリー・サポート事業が、公的な保育事業へと移行してゆく必要性について言及している。さらに、制度的および日常生活レベルにおいて、母親の手によるケアを相対化してゆくことの重要性を提示した。

本書では、数多くの知見が見出された。例えば、いわゆる「恵まれた層」といわれる「専業母」について、その足元は存外に脆く、またその立ち位置は柔軟性に欠ける雇用制度によって構築されてきた側面があることを指摘したことはその一つであろう。この点において、「近代的母親規範」から逃れることが最も難しい集団を調査の切り口としたことが奏功したといえる。更に、視点をマクロ的な政策と個人間相互作用というミクロな部分の二点においたことにより、最終的に現在の子育て支援制度が「近代的母親規範」を基盤としてしまっている点を示したことも本書の大きな成果であるといえる。なお、本書の最後に、著者が執筆の動機に言及しており、自身が子育てで子どもを預けることへの困難を経験したこと、また自己とは異なる立ち位置にいた「専業母」たちに関心を持ったことなどをあげている。その点において、母でありつつ「専業母」ではなかった著者のユニークな立場性が活かされた研究結果となったといえるであろう。このように、意義のある研究であるが、理論的なアプローチにおいて更なる発展が期待される。例えば、要となっている「アイデンティティ」概念について、理論的な側面でもより掘り下げた整理がなされると、さらに多様な分析が可能となったのではないと思われる。このような点も含めて、今後の著者の研究動向が注目される。